

「没(meí)」の成立について

中村雅之

1. 「meí」の例外性

現代漢語の「没」には「mo」と「meí」の2音がある。前者「mo」は「没落」や「沈没」などの熟語に用いられるもので、「しずむ」の意味をもち、後者「meí」は動詞「有」の否定語として、「ない・いない」を基本義とする。

音韻史の面から見ると、「没」は中古音において「骨」「突」「勃」などと同様に「-t」の韻尾を有する入声字であった。しかし入声「-t」に由来する字の中で、現代音「-ei」の韻母を有するのはこの「没」1字のみである。「-k」由来の字においては、「黒hei」「得dei」「賊zei」などのように「-ei」は頻見するが、「-t」由来のものとしては「没meí」は全く例外的な音形となる。(同様に、「-p」に由来する「給gei」も例外的な音形であるが、今は問題としない。)

本稿ではこの例外的な「没meí」について、主に吉池(1994)の解釈を参考にしつつ、関連する問題を考えてみたい。

2. 吉池(1994)の分析

吉池(1994)は、ウェイド(Thomas F. Wade)の『清語階梯語言自邇集』(1880頃)中の「言語例略」において、「没有」に対して「mo yu / mê yu」、単独の「没」に対しては「mêi / meí」というローマ字表記がなされていることを指摘している。以下がそこに挙げられた例文である。

- a. 我那衣裳、你抽打了没有。wo na i-shang, ni ch'ou-ta-liao mo yu ?
- b. 那箱子你数過了没有。 na hsiang-tzū ni shu-kuo-liao mo yu ?
- c. 後頭那窗戸透風得利害、没有攔住的好法子。 'hou-t'ou na ch'uang-'hu t'ou fêng tē li-'hai; mê yu tang-chu-ti 'hao fa-tzū .
- d.、年歲不收成、百姓没有吃穿、.....nien-sui pu shou-ch'êng, pai(po)-hsing mê yu ch'ih ch'uan, ...
- e. 那是個俗字、字典上没有的。na shih ko su tzū: tzū-tien-shang mo yu-ti.
- f. 那書架子没現成的、.....na shu chia-tzū mêi hsien-ch'êng-ti,.....
- g. 家裡没規矩、是混乱、.....chia-li mei kuei-chü, shih 'hun-luan,
- h. 東西没布置、是雜乱、.....tung-hsi mei pu-chih, shih tsa-luan,

吉池氏はこれらの事実から、以下のように、現代の「meí」の音形が「mo yu」からの縮約ないし同化によって生じたものと解釈した。

「没有moyu」という発音において、「没mo」の「o」と「有yu」の「u」という唇音母音の間に先ず異化が起こり、「没mo」が「mê」となり、「没有mêyu」となった。しかる後に「mê」と「yu」の間に音の縮約もしくは同化が起こり、「没」は「mêi, meí」となった。

ここで言う縮約とは、「mêyu」という発音において、「mê」と「y」が結合して「mêi」となると同時に「u」は同じく唇を使う「m」との異化によって脱落したという考え方について言ったものです。

異化 縮約・uの脱落

moyu mêyu mèi,mei

また同化とは、「mêyu」という発音において、「mê」の韻母「ê」[ə・]の引き伸ばし部分[・]が「y」の同化作用を受けて「i」となり、その結果「mèi」という音節ができた。しかる後に「yu」が脱落したという考え方について言ったものです。

異化 同化 yuの脱落

moyu mêyu mèiyu mèi,mei

すなわち、「mei」は伝統的な字音の流れを汲むものではなく、「moyu > mei」という変化によって生まれたものだというのである。また、ウェイド自身がこの書の中で「mei」について「a corruption of mo yu」と述べていることも紹介して、ウェイドがすでに縮約・同化説を持っていたであろうとし、その学説史上の重要性を指摘している。

以上の吉池氏の解釈ならびに紹介は、それまで例外とされた「mei」の音形について明快な説明を与えるものである。ここではその説明を大筋で認めつつ、いくつかの周辺的な問題に（あまり系統立てずに）触れてみたい。

3. 他資料の表記

ウェイドの『清語階梯語言自邇集』『言語例略』では「没」に対して「mo/mê/mèi/mei」の4種の表記が見られたが、この書の他の箇所では「没」の音として「mo4/mu4/mei2」の3音を記している（数字は声調）。後者がおそらくは当時の「没」の官話音として一般に知られていた音の提示であるのに対して、「言語例略」の表記は北京人の発音を可能な限り忠実に表わそうとしたものと理解される。

『漢語方言詞匯』によれば、「没有」は北京で「mei iou」、済南で「mei iou / mu iou」、西安で「mo iou」とある。ここにもウェイドの記した3音が確認できるから、北方音はおおむね「mo/mu/mei」の範囲内にあると言える。また、「mei」の音が北京を中心にして広まったことを窺わせる。

Edkins(1864²)は「没」の標準的な官話音表記(common orthography)として「muh」を与え、その北京音(Peking sound)として「mei / mo」の2音を挙げている。エドキンズは主として南京音に基づいており、「muh」の「h」は声門閉鎖音を表わす。彼の記述によるならば、当時の官話としてもっとも一般的なのは「muh」であり、北京ではそのほかに「mei / mo」の2音が用いられたということになる。ウェイドが記した「mo4/mu4/mei2」は正にその状況を背景とするものであろうし、北京人の発音を記したと思われる「言語例略」の中に「mu」がないのもエドキンズの説明を裏付けるものである。

エドキンズから1世紀ほど遡った乾隆年間の『兼滿漢字滿洲套話清文啓蒙』には当時の口語音が滿洲文字で表記されているが、そこには「没有」は「mu io」とある（通常の転写にしたがって「io」としたが、これは音声としては[iu]を表わす）。その他の環境にある「没」も全て「mu」と表記されている。

さらに半世紀余り遡ると、『新刻清書全集』（1699）という資料がある。この書は滿洲語と漢語の対訳語彙集を中心として構成されるが、その中に「滿漢切要雜言」と題された部分があり、多くの漢語口語語彙を滿洲文字表記とともに収めている。残念ながら「没有」は見出されないが、「没」を含む表現は次のように二様の表記で現れる。

没用的 me yung di / 没天理 me tiyan li

没要紧 mu yoo gin / 没正经 mu jeng gin / 没影兒 mu ing ei / 没体面 mu ti miyan

限られた資料ではあるが、「没」の発音としては「mu」が一般的であり、「me」も部分的に存在したことがわかる。満洲文字で記された「me」はウェイドの「mê」と同様に[mə]と解してよいから、「没」には17世紀の段階ですでに中舌母音をもつ発音が部分的に存在していたことになる。そしてその発音が「没天理」に見られるということは、[mə]は必ずしも後続の円唇母音との間の異化作用によって生じたものではない可能性を示すものである。(ただし、ここでの「me」とウェイドの「mê」を直接に関連するものと見なしてよいかどうかには、なお考慮の余地がある。)

いずれにせよ、以上の資料によって、清朝には「没」の発音として「mu」が最も一般的であったことは疑いない。したがって、エドキンズの述べるとおり、「mo」「mei」の2音は北京音を特徴づける音形とすることができる。

4. 縮約の要因

「没有」に縮約が起こった主たる要因は「有」の軽声化にあったと思われる。北京音では「否定辞 + 動詞」という表現は、否定辞の部分に強勢が置かれ、動詞の部分は相対的に弱化する傾向が顕著である。「強 + 弱」の形式が「moyu > mei」という縮約を誘発したものであろう。

同様の現象は「不」の場合にも見られる。まず、「不是」においては通常「是」は軽声化する。また、「不要」においては縮約が生じ、「別bie」となっている。「不用」も縮約の結果、「甬beng」となる。

5. その他の縮約語

否定語以外にも「強勢音節 + 弱化音節」タイプの疑問詞や人称代名詞などには縮約を生じるものが多い。次の例はいずれも唐末～宋代頃に生じた変化であるが、便宜的にピンイン風の簡略な表記を用いることにする。

什麼shimo > 甚shim (> 甚麼shimmo > shenmo > shenme)

作麼zemo > 怎zem (> 怎麼zemma > zenme)

你每nimui > 您nim (> nin)

我每gamui > amui > 俺am (> an)

これらの例を参照すると、吉池(1994)に言う“縮約”と“同化”では、“縮約”の方が可能性が高いと言えるであろう。資料を時代順にたどれば、「shimo > shimmo > shim」ではなく、「shimo > shim」の変化が起こった後で「shimmo」が生まれたいいことが見て取れるのである。「没有」の場合も、「言語例略」に「meiyu」の表記が見られないのは、「moyu」が「meiyu」の段階を経過することなしに「mei」に変化したことを示唆する。

6. 縮約語の声調

上記「你每nimui」と「我每amui」は声調において同じ環境にあるが、その縮約形は声調が異なる(nin2とan3)。このことから、縮約が起こる場合にどの声調になるかは恣意的であると考えられる。

しかしながら、「没mei2」のみならず、「別bie2」「甬beng2」「甚shen2」「您nin2」など、多くの縮約語が2声になっていることも事実である。

結局、「没mo4」と「有you3」の連結からなぜ2声の縮約語が生まれたかという問いに対しては明快な解答を提出できないが、縮約語が2声になる傾向が強いということは言えそうである。

<参考文献>

吉池孝一(1994)「没meiの発音について」『語学漫歩』18号、東京都立大学語学懇談会。

Edkins(1864²) *A Grammar of the Chinese Colloquial Language Commonly Called the Mandarin Dialect*, Shanghai(初版は1857).